人権教育だより

第６６号
発　行　長野県教育委員会
編　集　人　権　教　育　課
発行人　山　越　　和　男

もくじ

○平成１５年度人権意識の高揚を目指すポスター、作文・詩の審査結果‥１～２
○入選作品の紹介‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥３～５
○長野俊英高校の人権教育に学ぶ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥５～６
○八坂中学校の実践‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥７～８

平成１５年度
人権意識の高揚を目指すポスター・作文・詩の審査結果

【応募状況・審査結果】

今年度、ポスターは８４９点、作文・詩は２６９点の応募がありました。

小、中、高校別の応募状況、入選者（校）一覧は下表のとおりです。御応募いただいた学校、児童生徒の皆さんに感謝申し上げます。

なお、中学生の作文については、長野地方法務局主催・長野県教育委員会共催で実施した「全国中学生人権作文コンテスト長野県大会」において、９，６０５点の応募があり、長野市立柳町中学校３年の荻原美幸さんの「老人とふれ合った中で」が長野県教育委員会賞に選ばれました。

応募状況（点数）

校　　種	小学校	中学校	高　校	合　　計
ポスター	６２５	１４７	７７	８４９
作　文・詩	１９６	５	６８	２６９
合　　計	８２１	１５２	１４５	１，１１８

入選者（校）一覧（敬称略）

賞	ポスターの部	作文・詩の部
最優秀賞	中野市立高丘小学校　２年　永井　桃香 諏訪市立諏訪西中学校　１年　小林　実桜 松本蟻ケ崎高等学校　１年　小林真由美	該当者なし

	ポスターの部	作文・詩の部
優 秀 賞	小海町立小海小学校　６年　黒沢　大地 豊科町立豊科南小学校　６年　後藤　　瞳 池田町立池田小学校　１年　渡邉　日菜 諏訪市立諏訪西中学校　３年　関　　翔子 諏訪市立諏訪西中学校　３年　藤森　晶子 諏訪二葉高等学校　１年　上條　瑛子 阿南高等学校　２年　仲藤　久美 松本蟻ケ崎高等学校　１年　小河原麻以	「小グループ一つ差別の元」 東部町立田中小学校　６年　ﾀｽ　ﾏﾘｱﾅ 「ほめてくれた」 上田市立北小学校　３年　目黒　愛海 「やさしくなれるほうほう」 豊科町立豊科北小学校　２年　細萱　尚汰 「友だちが教えてくれた」 豊科高等学校　２年　西澤　　桂 「差別をなくすために」 大町北高等学校　１年　新井　真央 「私の大事な友達」 大町北高等学校　１年　吉岡　沙織
優 良 賞	小海町立小海小学校　６年　井出　晴奈 北相木村立北相木小学校５年　井出　菜月 上田市立北小学校　３年　小山　理菜 諏訪市立諏訪西中学校　２年　小林　香奈 駒ヶ根市立赤穂中学校　２年　浅井　　彩 四賀村立会田中学校　２年　赤羽　智早 阿南高等学校　２年　小林　　綾 阿南高等学校　２年　原　　亮 松本蟻ケ崎高等学校　１年　柴田ゆりか	「正しいことを主張する」 小海町立小海小学校　６年　吉澤　真紀 「お日さまのようなわたし」 武石村立武石小学校　２年　鮫島　　陽 「大江磯吉の生涯から思うこと」 豊科高等学校　３年　竹内未須季 「外国人同士の理解」 大町北高等学校　２年　髙山　立輝 「障害者の父を持って」 大町北高等学校　１年　古川　佳栄
佳　　作	丸子町立西内小学校　１年　齋藤　圭太 飯田市立上久堅小学校　６年　塩沢真由朱 諏訪市立諏訪西中学校　１年　加藤　彩夏 四賀村立会田中学校　１年　長岩　　惟 長野市立若穂中学校　３年　竹内　夏希 阿南高等学校　２年　木下恵美子 阿南高等学校　２年　藤本奈津子	「あいさつにかけた思い」 東部町立田中小学校　６年　原　　悠介 「友達っていいな」 南木曽町立蘭小学校　６年　小林　桃子 「人権について」 長野市立七二会中学校　３年　大日方美帆 「交流を通して変わった気持ち」 大町北高等学校　１年　西沢友里加 「純粋な人達」 大町北高等学校　２年　原　三菜保
学 校 賞	北相木村立北相木小学校 豊科町立豊科南小学校 諏訪市立諏訪西中学校 四賀村立会田中学校 長野県阿南高等学校	東部町立田中小学校 豊科町立豊科北小学校 長野県大町北高等学校

【入選者の表彰等】

最優秀賞、優秀賞、優良賞の皆さんには、賞状と副賞の楯、佳作の皆さんには賞状が贈られました。また、応募された皆さん全員に参加賞が贈られました。

【入選作品の紹介】

入選した各部門別の最優秀賞のポスター、また、小学校部門と高等学校部門の作文の中から、優秀賞の作品を各一編ずつご紹介します。

高丘小学校２年　永井桃香さん

諏訪西中学校１年　小林実桜さん

松本蟻ケ崎高等学校１年 小林真由美さん

※なお、入選作品（佳作を除く）については、人権教育課のホームページでご覧ください。→ http://www.pref.nagano.jp/kyouiku/jinken/kasyokai.htm

小学生の部　優秀賞　「小グループ一つ差別の元」

東部町立田中小学校６年生　タス　マリアナ　さん

「小グループが出来ているから･････」そういわれた時、何もかもが崩れたように私の頭の中で響いた。

「まだ、そんなものがあるのか。」と自分に言い聞かせた。「なぜ小グループなんて作るの？なぜ皆と仲よくできない？」小グループ、そんなのがあるから、「あいつは嫌いだ」とか、「あの人変」と言う人がいる。あの人がどんな人なのか知らないのに、話しかけた事もないのに、勝手に嫌いだと決めつける。なぜもっと話しかけない？謎のよう。人間って、こんなものなのだろうか。

私は、人をいじめた事、いじめられた事、差別をした事、小グループを作った事･････色々ある。五年生の時、外国へ行った。そして、六年生の二学期に戻って来た。友達は皆変わっていたけど、少し悲しかった。当然、小グループがまだあると思っていた。でも、こんなになっていたとは思わなかった。前は小グループを作っていた自分なのに･････。

このとき私は思った。「小グループの人達を見ていると情けなくなる。自分もこんなだったのだろうか？我ながら嫌になる。」私は、小グループの少なかった国を見て少し冷静になった。私は色々な人達と話をして分った。一人一人の立場を考えて、大切にしなければならないことを。人の立場を考えないから自分の立場が分らなくなって、嫌われて、友達が少なくなる。それが

小グループ。嫌ですね、こんなの。そして、小グループ同士の争いが始まる。小グループ１のＡさんは、小グループ２のＢさんの陰口を言う。ＢさんはＡさんの陰口。そうなるとダメですね、もう。

小グループができることで、これまで何人の人を悲しませることになったか。だから・・・・・いけない。だから・・・・・いじめたり差別をしてはいけない。

なので、最後に、この作文を見てくれた人達へ。

「この果てしない青い空の下にいる人達へ。

私は、海、空、大地を渡って、小グループの少ない世界を見てきた。この日本も、小グループの少ない所になってほしい。いじめ、差別、小グループ、そんなものは必要ない。だから、この広い空の下に私達はいる。皆が仲よく暮らせるように頑張るため。皆のために皆が頑張る。そう、皆が仲よくすれば、いじめや差別、小グループがなくなる。どんな人でも、私達と同じ人間なのだ。私達の身の回りの人達と、仲良くしてくださいな。」

高校の部　優秀賞　「友だちが教えてくれた」

長野県豊科高等学校　２年　西澤　桂　さん

私は面白いことが大好きだ。例えば、友達と遊ぶ事。ラムレーズンを食べる事。新しい経験をすることや、体育の授業。もちろん、嫌いなこともある。親に怒られることや勉強することだ。

しかし、私は人間としてちゃんと理性を持っている。将来のために勉強も頑張り始めた。親に怒られるようなこともしないようになった。

皆、こうやって「自分」というものがあって、コントロールしながら学校へ通っているのだと思っている。

中学生の時、私はある友達と仲よくなった。その子はよく先輩から呼び出しをされ、言葉のいじめを受けていた。ある日、彼女が『もうやだ・・・・・・』と言って、涙を流した。いつもは平気な顔をして泣く事もなかったのに、その日はいつもに増してすごかったようだ。九人の女の先輩達が、あまり陽の射さない教室で彼女を取り囲むように立つ。一方的に、『派手なんだよ！むかつく！！』と怒鳴り上げる。返事をしないと怒鳴り、言葉を返すと嫌味を言われるのだ。

その友達が最後に呼び出された日、直接私は関係なかったが、その友達を追っていった。先輩達からは消えろといわれたが、二人で立ちすくんでいたら笑いものにされた。それにカチンときたので言い返した。汚い言葉で二言くらい言うのが限度だった。声が震えて泣きたくなった。その日からいじめを受けるようになって、はじめて痛みというものが分かった。

私もいじめをした事がある。不親切だからと嫌われていた子を私もシカトした。嫌いになったのは、その人と席が前後になった時のこと。前の席に座っていた私に後ろを向いてやって欲しいと言われてやっていたら、先生に怒られてしまった。しかし、その子は知らん顔していたのだ。それをきっかけに私はクラスの友達にあの人が嫌いなんだという話をしたら、クラスの女子に広がり、私も嫌いということになり、大勢でのいじめが始まった。そして数日が過ぎて、その子が教室で泣いていたと友達に聞き、いじめは終わった。

今思い返すと、恥ずかしい事をしたと思う。本当に後悔しか残らない。

「理由がなんであれ、いじめはいじめでしょ。言いたいことがあんなら本人に言えばいいじゃん。何も集団でやることないっしょ。」こう言われたのは、ある友人に、いじめをしたことがあると、なにげなく言った時返って来た言葉だ。こう彼女に言われた時は、自分の心の内で「私は被害を受けたのだから、いじめをしたのは仕方ない」と無理に合理的に考えていたため「何も分ってないくせに」という気持ちがわき起こってきたが、それはすぐにおさまって、悔しくなって、泣きたくなった。でも、その時から私の考えは、１８０度変わった。

先生とか親じゃなくて、すごく仲の良い友達に言われたからこそ、心の中にすーっと入ってきてぐっと掴んだのだと思う。

いじめをする人はどこか目立つ人や理解のできない考え方を持っている人が気になり、自分ではない他人だからこそコントロールできないことをなんとなく気づきながらも、どうにかしたくてイライラするのではないか・・・・・。少なくとも、『自分』をしっかり持って生活が充実している人は、とてもそんな気にはならないと思う。

やりたい事を見つけることは必ず人を育てるはずだ。私はそれを心と体で実感している。例えば、小さな事でもいい。オリーブオイルと小さなカードを袋に入れてプレゼントしてみようかな、とか、今年の夏はスカイダイビングをやってみたいなぁ、とかの好奇心を常に心の中に広げておくと、すべての見方が一転する。

人間は自由で平等に生きていくのが当たり前だと思った。

人間だからこそ感受性があって、また、それを動かす事ができる。友人の話を聴き、心を動かす事が私にはできるだろうか？ あなたはどうですか？

長野俊英高校の人権教育に学ぶ

７月４日(金)に長野俊英高校を会場にして、第４通学区人権教育中高連絡協議会が開催されました。　長野俊英高校は、環境・福祉教育に熱心で、昭和６１年から毎月定期的に、通学路などの清掃や、毎年数回、地域の空き缶拾いを実施しています。その活動が評価され、５月下旬、日本善行会授賞式において生徒会が善行賞を受賞しました。また、生徒会が主体となって養護学校との訪問交流を行っており、全校生徒に呼びかけ自主的参加で交流会をもっています。さらに、松代大本営の調査をはじめとする郷土研究班の取り組みは、長野俊英高校の人権教育の核になるとともに、その活動実績は広く知られています。

当日は全学年で授業公開が行われました。落ち着いた授業の雰囲気に日頃の実践の成果を見ることができました。

各学年の取り組みを簡単に紹介します。

一学年「命どう宝」

沖縄の言葉「命どう宝」（「生きてあればこそ」）で授業がはじまり、「イラク戦争」を思い

出しながら戦争へのイメージを語り合い、沖縄を考え、平和や命の尊さを考え合う授業展開でした。生徒たちは「戦争はハイリスク、ハイリターン。」とか「必要がなくて意味がない。」と、自分の言葉で戦争について語り、戦争に対しての憤りを募らせていました。

二学年「戦争遺跡、松代大本営」（沖縄修学旅行事前学習）

郷土研究班は韓国放送公社(KBS)のドキュメンタリー番組で紹介されました。この番組は、地下壕の案内や周辺のごみ拾い、松代大本営地下壕についての住民への聞き取り調査に取り組む生徒たちの姿を、「日韓友好の新たな象徴」として取り上げています。

二学年では、このビデオを全員で視聴しました。自分たちの活動が他の国の人から高く評価されていることで、生徒たちの自尊感情を育てられることになります。また、松代大本営地下壕を通して生徒たちは平和、人権、国際理解など多くのことを考えることにもなります。

写真：地下壕内で東大生に説明する堤さん

写真：岩盤に折れて残された削岩機のロッドの位置で説明する藤沢君と北野君の二人

その後、三年生の代表から昨年の旅行についての感想発表があり、生徒たちは興味深く耳を傾けていました。こうした内容が、同時に、これからの取り組みへの意欲づけにつながっているようです。

三学年「玄界灘を越えて、張本選手の右手」

在日朝鮮人、在日韓国人への人権問題を、「張本選手の右手」、「朝鮮の消えた日」、「むりやり日本につれてこられて」等の短い資料を読み、被差別者の気持ちに共感しながら、今も残る差別意識について、生徒たちの発表や話し合いが行われました。

「これからどうしていきたい？」という問いかけに「テレビニュースや新聞の記事からもっと情報を得て、民族差別の問題を理解したい。」とか「今の政治や社会のことをもっと知りたい」など意欲的な発言がみられました。

おわりに

長野俊英高校では、郷土研究班の取り組みを学校教育の中に位置づけ、人権教育や平和教育が効果的に進められており、生徒の主体性を大切にした教育活動が推進されています。また、松代大本営地下壕という地域素材を掘り起こすことで、平和教育、人権教育が推し進められていることも、生徒たちにとっては平和、戦争、民族差別など人権に関わる問題をより身近なものにしています。

八坂中学校の実践から

～Hさんの思いを実践力につなげる調査活動～

1　視覚障害のある方へ思いを寄せ始めたNさん

学級の時間に社会福祉について学習を進めてきたNさんは、車椅子体験や目隠し歩行体験などの活動を通して、次のような感想をもった。

> とにかく怖かったし、特に目を隠しているときは、違う世界にいるみたいだった。車椅子も思ったように進まないし、止まりたくても止まれなかったから、坂では怖かった。視覚障害のある方は、普段の生活で苦労しているのではないかと思った。

Nさんは、「視覚障害のある方は、普段の生活ではどんな苦労をしているのか」「目が見えないと、どんな気持ちになるのだろうか」とその日の生活記録に書いた。学級の他の生徒も同様だった。

そんな生徒の気持ちを感じたU先生は、視覚障害のため目が見えないHさんとの座談会を計画した。Hさんとの座談会では、生徒たちから次々と質問が出された。Hさんの生き方にふれたいと思った生徒は、Hさんから、目が見えなくなった時の気持ちを教えてもらった。

また、普段の生活の中で「自転車が点字ブロックの上に置いてあって困った」等の苦労についても知ることができた。

Hさんと出会って、生徒は、自分たちの身近な社会の中でも、障害のある方をとりまく環境が思いのほか厳しいのではないかと気づくことになった。そして、自分たちの生活圏であるO市が、障害のある方にとって住みやすい街なのかどうか調査することにした。

2　O市はHさんにとって生活しやすい街なのか

生徒は、総合的な学習の時間にO市に出かけ、４人グループでの調査活動を行った。O市の駅や公共機関や商店街で、自分で実際に見たり、住民の方々に聞いたりして、障害のある方に対して配慮のある街づくりがなされているかどうか調べた。

忙しくてなかなか対応してもらえない店もあったが、生徒は、根気よく調査活動を続けた。そうした中、普段あまり積極的に活動しない傾向があるNさんが、住民の方に進んでインタビューする姿が見られた。

この調査活動を通して、O市では設備的な面は、公共施設を中心に障害のある方々のために環境改善されてきていることが分かってきた。しかし、「人々の心の面はどうなのだろう。‥‥」と疑問を感じた生徒もいた。

障害者に関心のあるところはスロープがついていたり、トイレに手すりがついていたり、入ると電気がつくようになっていた。関心のないところは法律も知らなかった。

駅には点字ブロック、交番には自動ドア、車椅子の人用のインターホンもあった。
盲導犬も来たことがあるというお店もあった。

忙しくて、なかなかインタビューできない雰囲気のお店もあった。

3　調査活動をもとに自分の思いを語る生徒

調査活動を終えた生徒は、自分達の調べてきたことをもとに「O市がHさんをはじめ障害のある方にとって生活しやすい街なのかどうか」を考えた。生徒は、調査活動で撮影した写真を提示し、「生活し易いかどうか」自分の考えと根拠を発表した。

ステッカーが貼ってあったのは7件中2件だった。点字ブロックの上に物が置いてあった。

Sさん：点字メニューです。(写真を見せる)　障害のある方のことを考えているから安心できると思う。障害のある方用の駐車場に一般市民の方の車が止めてあった。一般市民の方が考えて自分のできることをやってほしい。

Mさん：私は、障害者の方が来られるのは困るというお店がほとんどだと思っていたけど、実際は、Hさんのように盲導犬を連れている方も受け入れようとするお店の人の気持ちを強く感じた。

T　：Hさんが来られていますので、お話を聞いてみましょう。

今日はすごくうれしかった。お店の人から取材して、不十分なところなどを冷静に見てきてくれてありがたかった。調査をしてくれたことが、お店の人が考えるきっかけをつくってくれたので、お店のサービスの改善につながる。

今日私が来るのに８０％自分で来られました。残り２０％は困りました。でも、見ていた人が「どこへ行きたいですか」と聞いてくれて目的の場所に連れて行ってくれました。これで２０％も解決です。障害は、まわりの人の気持ちによって、重くなったり、軽くなったりします。できるところまでは自分でやりたい。どうしてもできないものが残る。そういう時は、周りの人が「どうしたんだろう」という思いをもって見ていてくれると障害が軽くなるのです。

4　Hさんの言葉から、自分たちができることを考えた生徒

生徒は、発表と話し合いの中で、「環境改善だけでなく、人々の心の問題が大切であり、障害のある方の生活に関心を持つことが大切であること」を少しずつ感じ始めていた。

しかし、それが、まだ確かな考えにはいたっていなかった。そこで、Hさんから、自分に接してくれる人たちの心について話していただいた。

生徒は、Hさんから自分達の調査活動を認めてもらい、さらには、障害のある方のまわりにいる人がどういう気持ちをもってくれるとありがたいかというHさんの思いを聞くことを通して、自分の考えをより確かなものにすることができた。

Hさんとの学習を通して確かな考えをもった生徒

Nさん：障害の重さは周りの人たちの気持ちによって変わるというのは、O市でも言えると思った。私の調べたところでは、いろいろな人が障害のある方への対応の工夫をしていて、障害のある方はあまり困らないのではないかと思った。だけど、どうしても昔どおりのつくりのお店は、設備面では困るけど、みんなが思いやりをもって接しようとしているので、そんな気持ちが障害のある方に通じるのではないかと思った。

Sさん：設備だけよくても、完全にはよくなくて、周りの人の目、お店の人の目と心が大切だということが分かった。私は、障害のある方がいたら、障害のある方がどこまでできるのか考えて、「何かお手伝いすることがありますか。」と声をかけていきたい。

U先生は、授業後、「生徒が意欲的に調査活動を行い、障害のある方の気持ちに寄り添って真剣に考えてくれた。Hさんと交流をもち、自分の障害に対する思いを話していただいて本当によかった。これからもHさんの思いを大切に受け止めて生活していってほしい」と語ってくれた。